

体型を考慮した和服の縫製方法（第4報）

仲村 洋子、永野 順子

I はじめに

様々な体型を持つ若い女性に気軽に和服を着てもらうために、これまで経験と縫製技術によって対処してきた問題点を解消するために、体型を採寸によって把握しようと試みているのが一連の研究である。

第3報¹⁾以後も被服学科3年次の学生の協力を得て、私たちが想定した「割り出し法」によって試着衣を縫製し、着装実験を繰り返してきた。そして、学生の実験結果による意見を参考に、採寸部位や割り出し方法の修正を行ってきた。

そこで今回は、この成果を踏まえて、体型の異なる3人の別科家政専修の学生を対象として、縫製技術の安定を図るために同一人によって製作された試着衣によって、着装実験を行った。これは採寸や縫製方法が、仕立上がり寸法や着装時の表情に及ぼす影響を探り、あわせて「割り出し法」の妥当性の検討を進めることを目的としている。

II 着装実験

1 採寸部位と計測結果

より正確な体型を把握するために、これまで積み重ねてきた実験によって、採寸部位の位置を是正したり、採寸箇所を増やしたりしてきた。そこで、第1報の第1表²⁾に示したものと重複するところもあるが、採寸部位とその寸法を利用する箇所を記すこととし、あわせて被験者の計測結果を表示したのが第1表である。

(1) 採寸部位の是正

着丈や衿の寸法を求めるために採寸する、㊸の「尖椎より外踵まで」を床まで延長している。これは測定の正確さを図るとともに、腰紐などによって引き上げられる丈の融通性を考慮したためである。

第1表 採寸部位と計測結果

(単位: cm)

	採寸部位	長着の部分名称	I	II	III
イ	身長	袖丈・裁切り身丈	156.8	160.0	152.0
ロ	尖椎より床まで	着丈・衿	135.0	138.0	134.5
ハ	肩中央から乳まで	衿下がり	24.5	25.5	31.5
ニ	ウエストから肩を通過してウエストまで	繰り越し	80.5	82.5	83.0
ホ	尖椎よりウエストまで-2.	繰り越し	34.0	36.5	35.0
ヘ	頸囲	衿肩みき	34.0	35.0	39.0
ト	腰囲	後幅・前幅・衿幅・合づま幅	93.0	92.0	115.5
チ	掌囲	袖口・身八つ口	21.0	22.5	22.0
リ	腕付根囲	袖付	39.0	40.0	49.0
ヌ	ウエストから床まで	衿下	98.0	100.0	98.0
ル	胸囲	抱幅	88.0	84.0	112.0
ヲ	胴囲	体型を正確に把握するため	64.0	64.0	95.0

⑥は「ウエストから背中心衿付線まで」としてきたが、和服を着ていない状態で衿付線を想定するのは困難であることから、三つ衿縫代を1cm弱とみなして、尖椎よりウエストまでの寸法から2cm引いたものを、繰り越し量算出の基準とした。

(2) 採寸箇所の設定

採寸で得られた数値は個人の体型把握の基礎資料となり、ここから仕立上がり寸法が導かれる。したがって、私たちは必要最小限のデータを正確に求めることを心掛けてきた。第1報で多くの裁縫書を参考に定めた採寸部位は、第1表の④から⑨までの9項目である。

着装実験を繰り返すうちに、体型と深い関係をもつものの一つに衿下寸法があることを認識した。当初、衿下寸法は身長から導き出せるとして、身丈の2分の1に2cm乃至4cm加えた融通性のある丈を設定した。しかし、同じ身長のもので、下半身の形状によってしばしば、衿先がお端折りの下にてしまったり、衿先が腰紐にかからない程高い位置になることが判明した。そこで実測を用いるのがよいと判断して、⑥の「ウエストから床まで」の項目を設けて、衿下寸法はこれより18cm減じたものとした。和服は着装する時、衿先を腰骨に当てる。そこで、ウエストから腰骨までの長さに外果高を加えた寸法をおおむね18cmと定めている。

着装実験によって学生が指摘するもう一つに、腰囲の寸法から得た身幅で縫製された試着

衣は、下半身が体に合うのに対して、胸囲りのゆとりが多すぎるという指摘である。洋服のようにゆるみを科学的に導き出した衣服を着馴れた若い女性にとって、上半身の動きの自由をすべて脇の布のゆとりでカバーする形態の和服には違和感があると思われる。そこでこれを将来解決するためには、胸囲と胴囲の把握が必要になると判断して、㊶および㊷の項目を設けた。

第2表 割り出し法と仕立上がり寸法

(単位：cm)

名 称	割 り 出 し 法	I	II	III
袖 丈	身長×1/3	52.3	53.5	50.7
袖 口	掌囲×1/2+10.~12.	21.5	22.3	22.0
袖 幅	衿×1/2+1.内外	33.8	34.5	33.7
袖 付	腕付根囲×1/2+2.~4.	22.5	23.0	27.5
身 丈 (裁切り)	身長	156.8	160.6	152.0
着 丈	実測 (尖椎より床まで)	135.0	138.0	134.5
衿 肩 明 き	頸囲×1/4	8.5	8.8	9.8
繰 り 越 し	(ニーホ×2)×1/3	4.2	3.2	4.3
身 八 つ 口	掌囲×1/2+2.~4.	13.5	14.3	14.0
衿	着丈×1/2-2.~3.	65.5	67.0	65.3
肩 幅	衿-袖幅	31.7	32.5	31.6
後 幅	腰囲×1.5×1/2×15/35	29.9	29.6	37.1
前 幅	腰囲×1.5×1/2×12/35	23.9	23.7	29.7
衽 幅	腰囲×1.5×1/2× 8/35	15.9	15.8	19.8
合 づ ま 幅	衽幅-1.5	14.4	14.3	18.3
衽 下 が り	ハ-3.	21.5	22.5	28.5
衿 下	ヌ-18.	80.0	82.0	80.0
衿 幅	規定寸法 (5.5)	5.5	5.5	5.5
〔備考〕 1. 衽下がりは肩山からの寸法記載 2. 衿肩明きは上がり寸法記載 3. 寸法に幅のあるものはその真中の寸法を採用 ただし、衿だけは最小寸法を採用 4. 試着衣縫製の際、割り出し法により得た寸法を訂正した箇所 試着衣縫製寸法 III……袖幅30.0 肩幅35.3				

2 試着衣の仕立上がり寸法

試着衣を縫製するために、被験者3人の計測結果から割り出し法に基づいて算出した仕立上がり寸法は第2表の通りである。なお、割り出し法が一部手直ししてあるのは、上記の採寸部位の是正に伴うものである。

3 試着衣の縫製

第2表の仕立上がり寸法を用いて、3枚の試着衣を縫製した。材料は市販の綿100%の縞木綿を使用し、しるしのつけ方・縫い方はこれまでと同様、『平面構成学実習I』の「大裁女物ひとえ長着」³⁾の項を参考にしている。

試着衣IIIの肩幅が計算上、後幅より5.5cmほど狭くなったための処置として、『和服寸法百科』⁴⁾により、袖付線を逆斜めに縫製することにした。しかし、縫製する上で5.5cmを袖付と身八つ口の合計寸法のなかで消化するのは困難である。そこで桁丈は確保しながら、袖幅と肩幅で調整することとした。すなわち、第2表の備考に記載したように、袖幅を30cmとし、その差の3.7cmを肩幅に加えて、極端に斜めになることを避けて、縫製可能になるように心掛けた。ただ、これまで実際に逆斜めになることを避けてきたこともあって、着装した際、視覚に訴える影響がどのようなものであるかが懸念される。

なお、今回も寸法を重視して布幅の不足は補っているが、昨今市販されている浴衣地をはじめ、着尺地には幅の広いものがあるので、その範囲内にはとどめてある。

この他、縫製に当たっては、これまでと同じように衿下などは耳を使用して、縫製上省略できる箇所はなるべく省略している。

4 着装条件

大きく体型の異なる被験者に、同一の条件によって縫製された試着衣を着装してもらうことによって、割り出し法の問題点を追求するためには、着装方法を均一にする必要がある。そこで、次の5項目に注意して同一人によって着装させた。

- ① 背縫を背中心に合わせる。
- ② 左前身ごろの衿先を右腰骨に当てる。
- ③ 肩山を肩線に合わせる。
- ④ 肩から胸にかけて出来るだけ皺の寄らないように注意し、上半身と下半身の衿付線を揃えることによって、自然の状態で見当点直下に前面衿の交差位置を決める。
- ⑤ 身幅のゆとりは両脇に寄せる。

5 実験結果

着装した各被験者を前面・背面および両側面から撮影したのが第1図である。これらの写

真と着装時の観察によって、次のような結果が得られた。

(1) 被験者Ⅰについて

標準寸法によって縫製された和服が、体型の変化にどの程度対応できるか、すなわち、標準寸法の許容範囲を調査した「和服構成における標準寸法について」⁵⁾の研究がある。これによると身長154cm、腰囲84cmのものから、身長167cm、腰囲99cmの大柄な被験者まで、着装時の表情はそれぞれ違うが、おおむね「良し」という結論が出ている。

被験者Ⅰは、いわゆる中肉中背といわれる日本人の標準的体型である。実際、着装写真を検討しても、特別問題になる箇所は見当たらない。計算の上では繰り越し寸法は少し多めに感じられたが、着装時には背後の衿が抜け過ぎているとは思われない。

以上の実験結果から標準的体型であれば、私たちが想定した「割り出し法」は、充分に対応できると判断される。

(2) 被験者Ⅱについて

計測結果からもわかるように、被験者Ⅱは背が高く瘦身体である。腰囲は92cmと身長に対して、非常に痩せているとは思われないが、頸が細いので上半身がより痩せているように見える。写真によると衿が頸から離れ、前面衿の交差位置が低い。先に発表した「和服構成における割り出し法の妥当性について」⁶⁾の研究で、前面衿の交差位置は頸窩点より3.8cmが妥当としているが、被験者の交差位置は9.4cm下がっている。これは明らかに下がり過ぎで、より瘦身体であることが強調される。

(3) 被験者Ⅲについて

被験者Ⅲはいわゆる肥満体型で、標準寸法で仕立てた和服は到底着装できない。そうした意味では割り出し法によって仕立てられた試着衣は幅においては充分補えたものと観察される。上がり衿肩明き9.8cm、繰り越し量4.3cmという、衿肩回りも決して広く感じられない。縫製の際指摘した袖付線の逆斜めも、極力差を少なくしたこともあり、また、袖付寸法が多いことも幸いして、思ったほど目立ってはいない。しかし、肩幅を広げた結果として、袖付線が上腕中間くらいまで下がっている。

写真によって観察すると、被験者の上半身前面の脇に布がたるみ、背面袖付が脇下に食い込むように見える。これは着装の際、下半身を整え腰紐を締めた時、前面上半身に残された布丈が少なく、肩山を肩線に合わせると前のお端折り分が出てこなくなる。俗に「きものは肩で着る」と言うが、身体の厚み分を丈に加えておく必要を顕著に現している。なお、写真は肩山を前にずらして着装している。

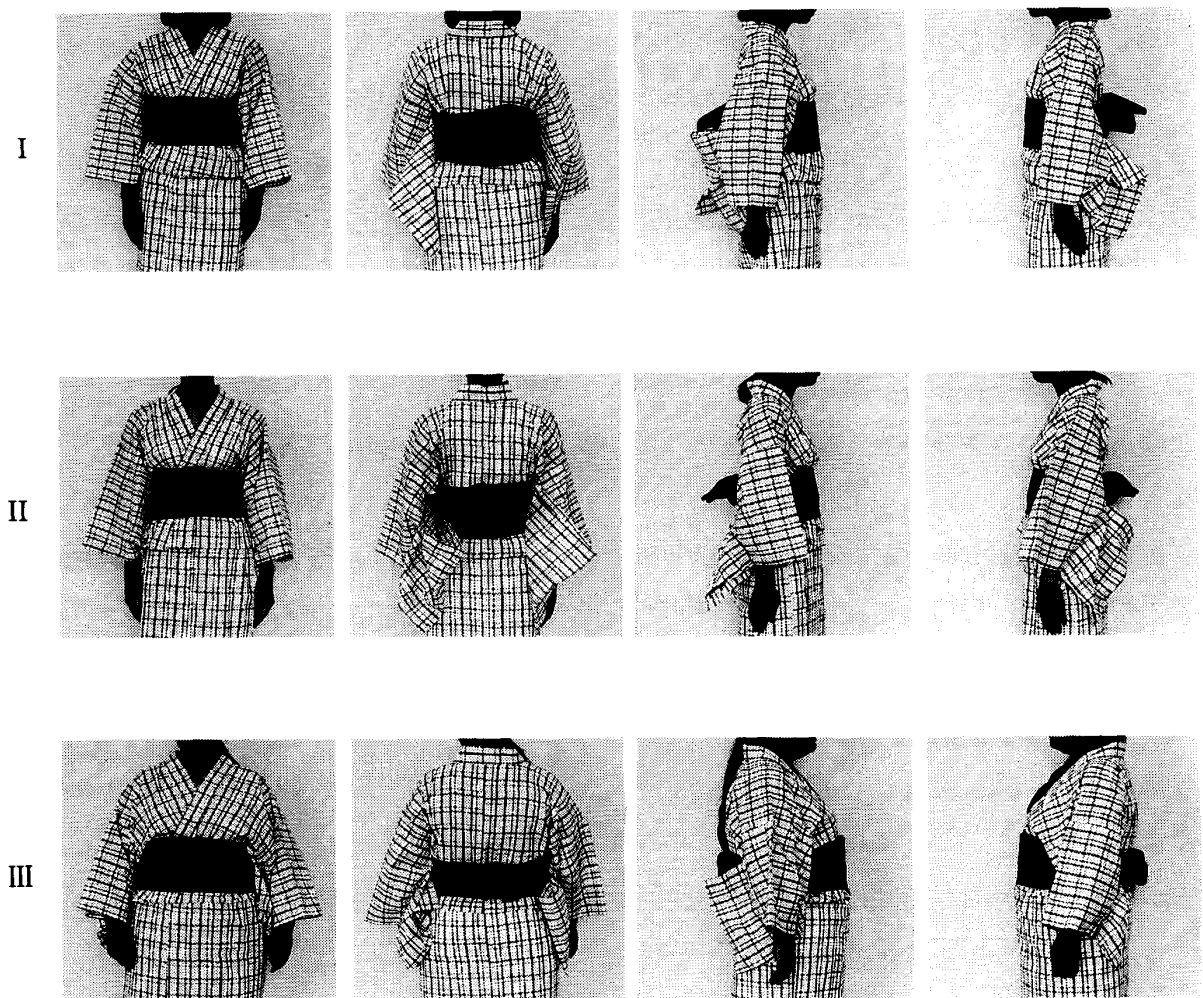
6 試着衣の修正

以上が試着衣の着装結果である。これを受けて指摘した箇所を修正して、再度着装実験を行うことにした。すなわち、被験者IIについては前面衿の交差位置をあげることに、被験者IIIでは上半身の布丈を充分与えることである。

(1) 被験者IIについて

前面衿の交差位置をあげる方法として剣先位置の移動がある。一つは衿下がりの寸法を減らすか、もう一つは剣先位置を中央に寄せるかである。

洋服が胸の膨らみを脇やウエストのダーツによって吸収しているのに対して、和服は剣先から上と下との衿付線の傾斜角度の違いによって、胸の膨らみ分を出している。剣先位置を中央に寄せるとゆうことは、傾斜角度の差を小さくしてゆとり分が少なくなる。そこで、今



第1図 着装実験 前面・背面・左右側面

回は衿下がり为标准寸法にならって1.5cmあげて、肩から21cmに修正して縫製し直した。

(2) 被験者IIIについて

下半身は身幅を広げることによって体型に見合うものと判断し、衿下寸法などそのままに、上半身のお端折り分として裁切り身丈を身長より6cm長くすることにした。これで採寸の際、衿下寸法を実測に切り換えた結果が得られたように思われる。

裁切り身丈の延長は帯下から出るお端折り分を6cmくらいにしたいという思惑からで、写真の状態から判断して決めたものである。

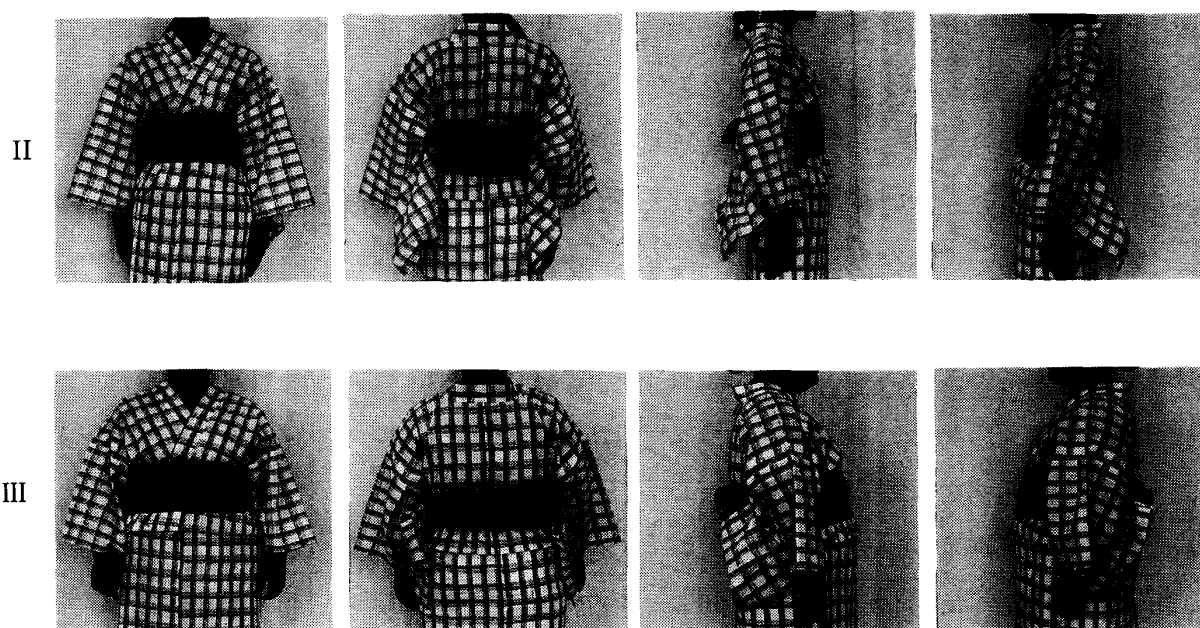
7 修正後の実験結果

修正した試着衣を着装条件にしたがって着装し、撮影したのが第2図である。その結果はおおむねよい方向に修正されたと判断できるが、1箇所の修正が他に及ぼす影響についても示唆される結果となった。それとともに、採寸では把握しきれない細かい体型の違いを是正するためには、先導者の経験を加味することの大切さも認識した。

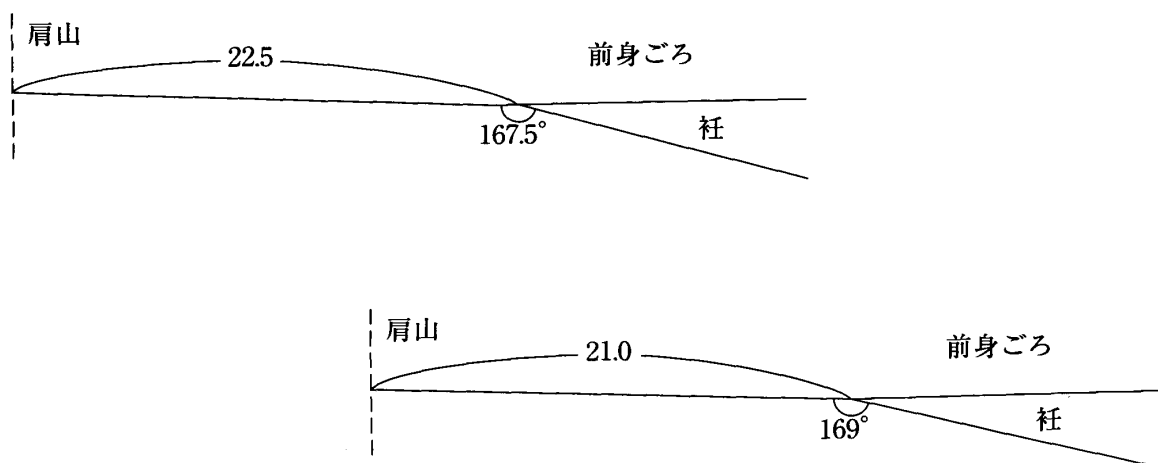
(1) 被験者IIについて

剣先の位置を上げたことにより、前面衿の交差位置が上がって交差角度が鈍角になり、衿が寝た形になって体に馴染むようになった。これが肩の衿付線を肩先にずらす効果となり、自然に衿丈が長くなったように見える。

剣先の位置を上げたことは、衿付線を微妙に変えることにもなり、剣先位置を中央に移動



第2図 修正後の着装実験



第3図 前面衽付線の比較

する程の違いはないが、前面の表情を変える一助になったものと思われる。この衽付線の差異を図示したのが第3図である。縮小した図では判断しにくいだが、両者の剣先上下の角度の差は1.5°程度のものであるが、修正した試着衣がより直線に近いものになっている。すなわち、胸のゆとり分が心持ち殺がれた結果となった。以上の2点のみに拠るものとは判定できないが、胸や背の皺を脇で吸収しやすい状況となり、写真にもその様子は現われている。

肩山の衽付線が肩先に移動し、前面衽が安定したことによって、背後の衽の形が変化している。今まで背中心に引き寄せられていた布が、すっきりと背中に馴染んで後ろの衽付線が鮮明に現われるようになった。それとともに、押し上げられていた衽が落ち着きを見せて、衣紋が抜けた形となった。採寸で求められた衽付の形そのままが正しく表現されたと言えるが、衣紋の量によって姿勢が悪いように受けとられる。

(2) 被験者IIIについて

身丈を6cm長くしたことにより、上半身の布丈に余裕が出て、肩山を肩腺に合わせて上下の衽付線を揃えるという、着装条件を満たすことが出来た。全体が体に馴染んで落ち着き、前面・背面ともに余分な皺がなくなっている。

被験者IIとIIIの側面から見た写真を比較した時、衣紋の抜け方に明らかな違いが感じられる。同じ採寸方法・同じ割り出し法を用いて算出された、衽肩明き寸法・繰り越し量によって縫製されたものである。衽肩明き寸法・繰り越し量ともIIIはIIより1cm大きく仕立てられている。しかし、体型の違いによって、ゆったりと落ち着いた表情を見せているIIIに対して、

先に述べたようにIIは猫背のように見える。

III ま と め

ここ数年間、多くの学生の協力を得て、進めてきた“体型に見合う和服製作”という課題に対して、同一人が異なる体型の採寸と縫製を行い、その結果を検証して観察するのが本研究の目的である。

標準体・瘦身体および肥満体の3者の着装実験結果により、採寸部位の是正や割り出し法の改善がおおむね良好に推移していることが確認された。しかし、同時に体型を数値で把握することの困難さも痛感させられる結果となった。例えば、瘦身体のものは体に厚みがないので、採寸通りにすると衿が下がり過ぎたり、肥満体の場合は幅だけでは解決できない丈への影響などが顕著に示された結果となった。こうした箇所の修正は従来から言われてきた縫製方法を取り入れて手直し、それが功を奏してより美しく体に馴染んだ和服に変貌した。

本研究において常に参考にしてきた、坂本弘子編『新被服構成学』においても「体型の観察と例」の項で“人体各部の寸法を測定して、和服製作の基礎とするとともに、着装する各自の人体の形態的な特徴を観察して、身体に適合した和服を製作する必要がある”と指摘している。長年にわたって培われた体型への対応は当を得ているものがあり、これをどのように利用するかが今後の課題である。

人体測定をすべての基本としている本研究においては採寸の正確さが要求される。これまでも採寸位置を固定するために外踵を使わずに、床まで延長してメジャーの安定を図っている。そしてこれによって、下半身については一定の成果をもたらしている。

しかし、上半身の測定は決め手に欠けている。例えば衿肩明き寸法の基となる“頸囲”といっても、付根の所と喉仏の部分では寸法に差が出るのは明らかである。殊に付根部分を採寸する場合には、採寸者によってもメジャーの当て方によっても異なる数値となる。衿肩明き寸法は1mm・2mmの違いが仕立上がりに影響する。もう一つ例を挙げると、衿下がり寸法を決める④の部位を「肩中央より乳まで」としている。肩中央とゆうのも曖昧な表現であるが、“乳まで”と言われれば普通乳首と受け取る。しかし、乳房の形は個人差が大きい。それとともに、着装した時の剣先位置は“肩中央から乳まで”の線上にはない。

正確な人体測定が美しく着やすい和服を製作する基本と捕らえたとき、採寸部位の設定や採寸方法の安定は不可欠なものであり、今後も求め続けなければならない課題である。

文 献

- 1) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要32 家政系編 p. 155～162 1992
- 2) 仲村洋子・永野順子：和洋女子大学紀要30 家政系編 p. 104 1990
- 3) 永野順子：平面構成学実習 I 衣生活研究会 1983 p. 46～85
- 4) 横山千年枝：和服寸法百科 西陣織工業組合・西陣和裁ファッションスクール 1994 p. 36
- 5) 羽生京子：和洋女子大学紀要33 家政系編 p. 135～144 1993
- 6) 仲村洋子：和洋女子大学紀要26 家政系編 p. 171～189 1985
- 7) 阪本弘子編：新被服構成学 株式会社相川書房 1984 p. 65～66

仲 村 洋 子 (本学専任講師)

永 野 順 子 (本 学 教 授)